

桜ヶ丘 いまむかし

第3回 桜ヶ丘のてっぺんから！

いろは坂を登り切ったところに金毘羅さまがありますね。そう！桜ヶ丘のてっぺんです。宮崎駿のアニメ「耳をすませば」のモデルの地であり、今もその昔も話題の地なのです。そもそもどうしてあそこに金毘羅宮が？

桜ヶ丘住宅地の北辺にある尾根の一角、切り立った崖の上であり、そこからは一望のうちに多摩川から東関東の大平野、西は秩父連山から遠く信越の山々も望むことができました。ここは昔の砦の跡で1333年（元弘三年）鎌倉攻めの新田の軍勢が、鎌倉の大將北条安家と鎬をけすって戦ったところ（関戸の戦い）です。

古城の跡であり、モノミの松と言われる大きな松があったと言われています。

戦いの時は兵士が登り見張りをしたとか。後に村の女性が裏切った夫への怨念で亡霊になり、夜中に表れるとの言い伝えがありました。



金毘羅宮創建は寛政～文化年間、関戸村の名主井上林蔵が四国の琴平宮からご神体を持ち帰り、大山（神奈川県）の宮大工明王太郎が林蔵の依頼で造営を請負、建てたのが始まりでした。文化12年には関戸村の絵師相澤五流派画の武者絵が府中本宿村の人々によって奉納されています。境内に残る石灯籠の破片には関戸の井上林蔵の他近隣の村々の人々の名前が刻まれていました。勧請元の四国の金毘羅宮が海上を守る神社であることから、多摩川の両岸の村の人々が投資したようです。（小野神社のそばに船着き場の跡）また周辺の商売繁盛の願いも。城山と呼ばれる山の頂上にできた金毘羅宮には、もう一つ、観光地を目指という役目があったようです。「江戸名所図会」他にも載っています。当時の金毘羅宮は1958年（昭和33年）に焼失し昭和41年に現在の社殿が再建されました。

天守台と金毘羅宮

人気作家の池波正太郎さんの「鬼平犯科帳」を読んだり、テレビでご覧になった方も多いことでしょう。鬼平・長谷川平蔵は故・中村吉右衛門丈の当たり役でした。一連の捕り物帖の中に関戸の天守台や金毘羅宮が出てくる一編があります。長谷川平蔵が単身で江戸から府中宿まで盗賊の首魁と思われる男を追ってきます。盗賊どもは打ち込みの日時や手筈を相談するために金毘羅宮の前の茶店にひそかに集まります。それを鬼平が見え隠れに追尾して、多摩川を舟で渡り、関戸の山道のつづら折れを辿ります。作家や編集者は出鱈目を書くわけではなく、古書、古地図、古老の話などをリサーチしたうえで書くはず。この池波本では土地の人たちはこの山を「城山」と呼び、頂上に天守台と金毘羅宮のお堂があったことになっています。天守台は昔々戦国の頃、関戸駿河守の居城だか砦があったものと推察されます。ものの本によると、関戸の天守台のことをこう記してあるそうです。「・・・城山の半腹より曲折して山頂に至るまで老松繁茂す。此の所より四方を望めば、もっとも絶景なり。」なるほど、多摩川、府中はもとより、武蔵野の原野も、遠く上野（こうずけ）・下野（しもつけ）の山々まで見えたでしょうね。鎌倉と足利を結ぶ当時の幹線道路の見張り台としては絶好の位置だったでしょう。



桜ヶ丘住宅地に文化的シンボルを！

金毘羅宮の道をはさんだ西側には浄水場があります。丸い貯水タンクには白い絵が見られます。水を守る神、竜がタンクを守っています。竜は空想上の生き物で中国では権威の象徴とされています。



給水塔(桜ヶ丘浄水場)

これは4丁目にお住まいの、版画家河内成幸氏の作品です。多摩市文化アドバイザーであった河内氏は多摩市を通じて水道局から浄水場のタンクに「住宅地に文化的シンボル」を描いてほしいと依頼されました。そう！あの白いものは玉を抱く竜なのです。竜！空想の生き物は！神の使いとして作物を実らせ、時に自然災害を起こし人々に警告を促し、人間社会を守る水神様とされています。



原画となった木版画【華 XⅡ～ XV】

河内成幸氏は「多摩地区には多摩川が流れている。水の流れは地表に現われたり、低地や地下を流れる所もある。多摩川を水の神、竜としたら、青梅市、立川市、と流れがみられる。それは竜が地表に表れ、宝の玉を置いた場所。竜が示した住みよい場所。桜ヶ丘地域は美しい多摩川が竜となって表れ、人々の生活を守ってくれているのではないか！」との思いを込めてデザインされました。浄水場タンクにはこの地の「シンボルの竜」が描かれ、この地域の人々の生活と安泰を見守ってくれているでしょう！

資料提供：河内成幸氏 「SEIKO KAWACHI Graphic Works 1988～1991」
多摩市所蔵「多摩の郷土写真」 <https://adeac.jp/lib-city-tama/top/>

